

## 昭和館特別企画展 展示構成

# 「時代をまとう女性たち」

会期：令和5年3月11日（土）～5月7日（日）

会場：昭和館3階研修室

後援：千代田区・千代田区教育委員会

展示点数：77点

内訳：

実物点 65点（内借用3点）

写真・画像 18点

映像 1点

## ごあいさつ

「ファッションは時代を映す鏡」という表現があるように、服装は時代の移り変わりと密接な関係にあります。昭和の激しい社会変化も例外なく、和装から洋装へ、家庭裁縫から既製服へ、特に女性の服装に大きな影響を与えました。

日中戦争が始まると、政府による「国民精神総動員運動」と物資不足が原因で服装も統制の対象となりました。終戦後も深刻な物資不足が続き、女性たちはおしゃれを楽しむ余裕はありませんでした。しかし、戦後、占領期にもたらされた新たな文化や女性の地位向上、経済統制が解除されるにしたがって、女性たちは次第に機能的な服装を選ぶようになり、昭和30年頃を境に、都市部では和装と洋装の着用率が逆転します。

本企画展では、昭和の世相とともに移り変わっていった女性の服装について紹介します。

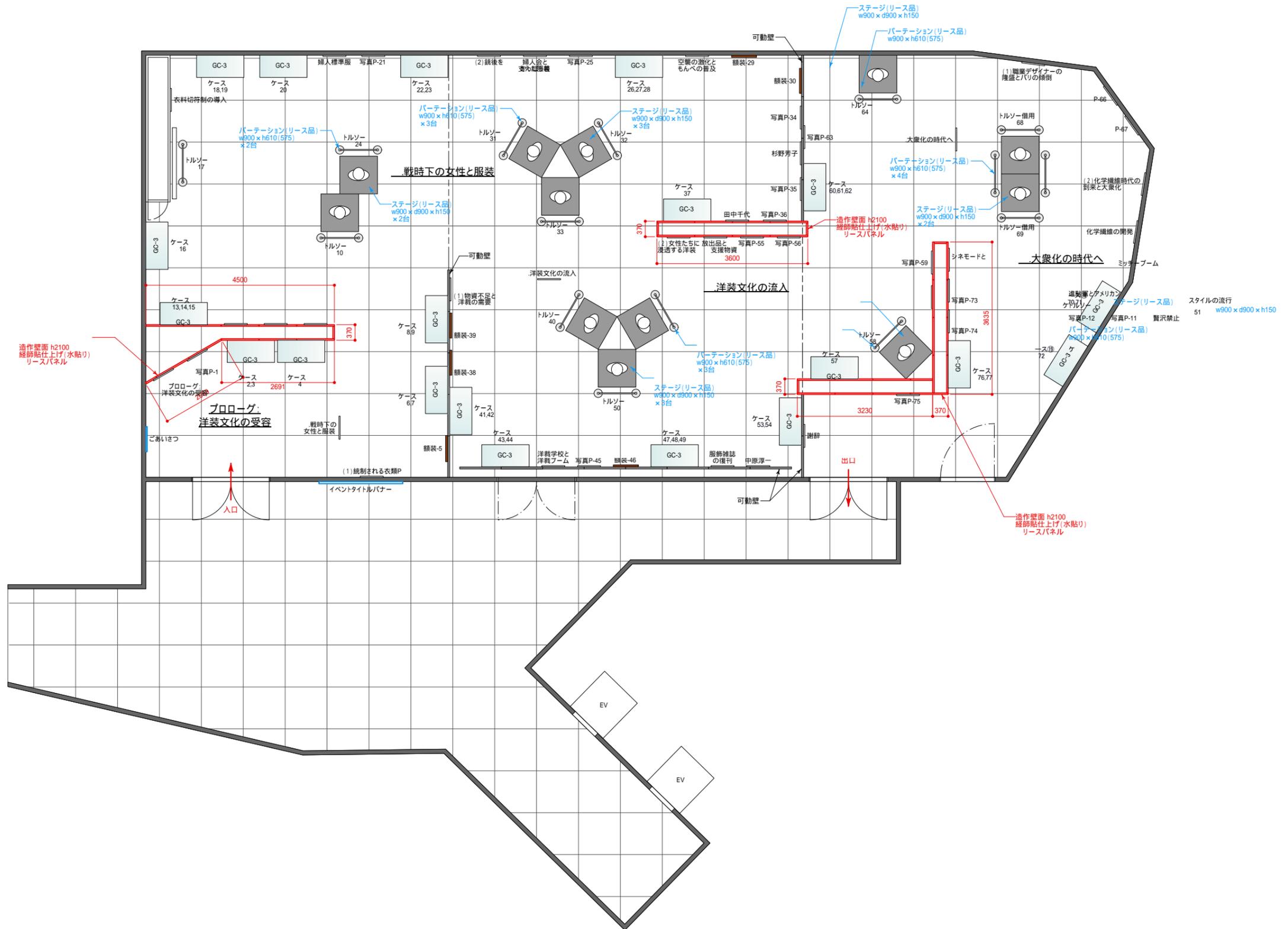
本展では、「 . 戦時下の女性と服装」、「 . 洋装文化の流入」、「 . 大衆化の時代へ」のコーナーに分けて紹介します。

### プロローグ: 洋装文化の受容

- . 戦時下の女性と服装
- . 洋装文化の流入
- . 大衆化の時代へ

昭和館 令和5年度春期特別企画展「時代をまとう女性たち」平面レイアウト(案)

2023.02.19



プロローグ：洋装文化の受容

開国以来、洋装は上流階級の服装でした。大正期の職業婦人の登場や大正12年(1923)の関東大震災、昭和7年(1932)の白木屋デパートの火事などを契機に、女性の洋装の需要が高まります。この頃、家庭では和装、職場では洋装といった二重生活を送る女性も多くなりました。

また、大正末期から昭和初期にかけて、モダンガールと呼ばれる洋装を着用する若い女性たちが婦人雑誌で紹介されると、洋装に対する関心はいっそう高まっていきました。



「ビルの居住者や外出婦人へ戒め」  
昭和7年12月16日に起きた白木屋デパート火災の記事。女性店員が和装の裾が乱れることを気にして、避難が上手くいかず、被害が拡大した。  
『東京朝日新聞』昭和7年(1932)12月23日付



銀座通りを歩くワンピースの女性と和服の女性  
おしゃれをして銀座を歩く女性たちの姿。洋装に身を包んだモダンガールや和装の女性など、女性の服装の和洋が混在している様子が見られる。  
昭和10年(1935)  
撮影：師岡宏次

ドロシー・エドガース

明治41年(1908)～昭和32年(1957)

日本育ちのアメリカ人デザイナー。昭和8年(1933)、高島屋が婦人洋装売場を設立した際に専属で雇用された。日中戦争の影響で帰国するまでの間、ファッションショーの企画や日本人向けのデザインの考案、『ホーム・ライフ』や『装苑』への記事執筆で洋装の普及に努めた。

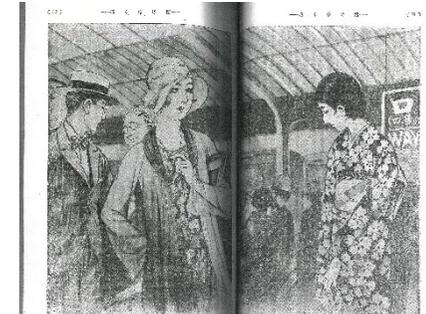
終戦後、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)経済科学局繊維部課長として再来日し、服装業界や百貨店復興に一役を買った。



「流行・婦人・子供洋装夏のグランドショー」  
高島屋で開催されたファッションショーの広告。ドロシー・エドガースが海外の流行を取り入れた日本人向けのデザインを発表した。  
昭和13年(1938)



「三越三月の御案内」  
三越の商品案内。洋装と和装の婦人服や小物が掲載されているが、洋装は外出時の衣類として紹介されている。  
昭和10年(1935)



「壊けゆく珠」(『婦女界』第42巻第1号)  
画：寺本忠雄  
『婦女界』で連載された菊池寛による長編小説の挿絵。洋装姿の女性が描かれている。雑誌の表紙や小説の挿絵、企業広告などでモダンガールが起用されることが多かった。  
昭和5年(1930)7月

・戦時下の女性と服装 (1) 統制される衣類

<p>・戦時下の女性と服装</p> <p>日中戦争が勃発した昭和12年(1937)、国民の戦意高揚と戦争協力を図るため「国民精神総動員運動」が始まりました。さらに翌13年に公布された「国家総動員法」の施行により、日常生活にもあらゆる統制が及んでいきます。</p> <p>昭和15年に男性を対象とした国民服令の発布、昭和17年には女性に向けて婦人標準服が発表され、被服の合理化を図りました。しかし、国民服と違い、婦人標準服は浸透せず、女性たちの間では、手持ちの着物を仕立てなおしたもんぺが普及していきいます。戦局の悪化とともに空襲が本格化すると、女性たちは昼夜問わずもんぺに身を包む生活を余儀なくされました。</p>	<p>(1) 統制される衣類</p> <p>戦争の長期化に備えて、物資を優先的に軍需用へ配分する計画を立てられるなか、最初に統制が行われたのは綿製品でした。昭和13年(1938)6月29日に政府が綿製品の製造・販売を制限する規則を公布したことにより、国民生活は大きな制限を受けようになりました。衣料用の原材料の不足を補うために、綿・ウール等の代用品としてステープルファイバー(スフ)が登場します。しかし、スフはパルプを原料としているため破れやすく、熱に弱いという性質がありました。</p> <p>昭和17年の衣料切符制により、衣料品への統制が本格化すると、それまで日常的に着用していた和装ですら、長い袖は非経済的で時局に不相応なものとして扱われるようになりました。</p>	
 <p>「ステープル・ファイバーに就て」 紡績会社がスフについて解説したパンフレット。粗悪品というイメージ払拭のため、企業などでスフの取り扱いに関するパンフレットが作られた。</p> <p>昭和13年(1938)</p>	 <p>スフリン スフの補強度を高めるために発売された薬剤。薬を水で溶かし、スフや人絹に浸すと5倍の強度が保たれるという謳い文句だった。</p> <p>昭和14年(1939)</p>	 <p>「ステープルファイバー優良製品展覧会」 百貨店で開催されたスフの展覧会ポスター。綿や毛に代わる合成繊維としてスフの活用が国策として推奨された。</p> <p>昭和14年(1939)</p>

・戦時下の女性と服装 (1) 統制される衣類



ハンドバッグ(紙製)

紙製の生地で作られた大日本国防婦人会のバッグ。綿や毛織物の代用として、紙繊維が帽子やかばんなどの素材として用いられた。  
昭和7年(1932)から昭和17年



「火薬原料綿供出三際シ御願ヒノ言葉」  
外国から綿花の輸入が出来なくなり、火薬の原料にも使われる綿の不足をうけて、埼玉県が家庭内にある綿の供出を求めた通知。  
昭和18年(1943)



スフ製の学童服

スフで作られた学童服。  
昭和8年(1933)以降

贅沢禁止

物資への統制が強化され、「贅沢は敵だ」という標語が登場するなか、昭和15年(1940)7月7日に「奢侈品等製造販売制限規則」(七・七禁令)が施行されました。西陣織などの絹織物や、宝石や指輪の貴金属・装飾品など、不要不急の品、贅沢品などの製造・販売が禁止されました。この規則には、物資不足から女性に時局にあった身だしなみを求める一方で、贅沢品を禁止することで、戦意高揚を図る狙いが含まれていました。



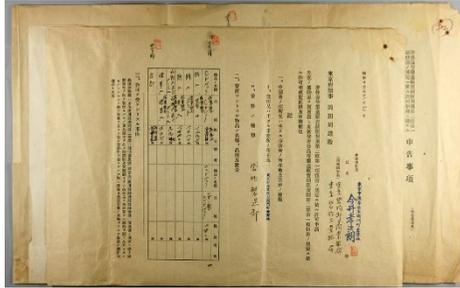
もんぺ部隊の行進  
昭和15年に大阪市内で行われた行進。「奢侈品等製造販売制限規則」の施行を受け、もんぺ姿の女性たちがプラカードを持って「贅沢は敵だ」と呼びかけ、法令をPRした。  
昭和15年(1940)10月6日  
毎日新聞社提供



服装を注意する警察官・大阪市  
パーマントや華美な服装で街中を歩く女性を注意する警察官。  
昭和15年(1940)7月31日  
毎日新聞社提供



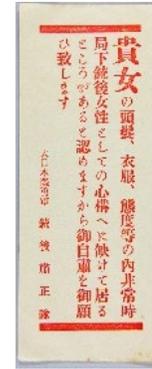
帯  
この帯には金糸が使用されていたが、贅沢品とみなされ、金糸を取り除くことになった。  
昭和13年(1938)から昭和20年



「奢侈品等製造販売制限規則第二條第一項但書ノ規定ニ依ル許可申請」  
 「奢侈品等製造販売制限規則」で制限された品物の販売許可を求める書類。  
 昭和15年(1940)11月6日



婦人隣組回覧  
 和装の袖を切るように呼び掛けた婦人会の回覧板。新品だけでなく、普段から着用していた和装の袖も非経済的であるという理由で裁断を求められた。  
 昭和18年(1943)10月22日



チラシ(銃後肅正隊)  
 街頭で配布されたチラシ。時局に相応しくない服装を指摘している。  
 戦中



振袖  
 時局にあわせて振袖の丈を短くして作られた振袖。  
 昭和20年(1945)

衣料切符制の導入

昭和17年(1942)、衣料切符と点数制が導入されます。都市部は1人100点、地方は1人80点の持ち点で配布されました。

しかし戦況が厳しくなるにつれて、衣料品の流通が滞り、切符はあるものの衣料品が購入出来ないという状況に陥ります。昭和19年以降は、1人の割り当て点数を大幅に削減して配布されるようになりました。靴下など、わずかな衣料品すら入手が難しい生活が続きました。



衣料切符  
 衣料品を購入する際には、お金と点数分の切符を用意しなければならなかった。  
 昭和19年(1944)4月1日から  
 昭和21年3月31日



衣料品点数表  
 衣料品を購入する際に必要な切符の点数が、品目ごとに記されている。  
 昭和17年(1942)2月1日



反物  
 公定価格と衣料切符の点数が記載された反物。物資不足による物価高騰を防ぐため、昭和14年に制定された「価格等統制令」に基づき、公定価格であることを示す「マル公」の表示が記載されている。  
 昭和17年(1942)以降

・戦時下の女性と服装 (1) 統制される衣類

<p>婦人標準服</p> <p>衣生活の合理化と戦意高揚を目的とした国民服の制定を受け、女性にも標準服を定めるべきという世論が高まります。厚生省(現・厚生労働省)は、洋裁教育家たちによる婦人標準服研究会を設置し、昭和年(1942)に婦人標準服を発表しました。デザインには洋装型の「甲」が2種、和装型の「乙」と活動衣の4種が選ばれました。</p> <p>しかし、空襲時には裾が危険なうえ、活動性に欠けることからほとんど着用されませんでした。</p>	 <p>婦人標準服発表会 昭和17年の婦人標準服発表会で発表された、計4種の婦人標準服。</p> <p>昭和17年(1942) 毎日新聞社提供</p>	 <p>「婦人標準服図説 第2輯」 婦人標準服の解説図。婦人衣類の文化的成長に備えるため、婦人標準服にはデザイン面である程度の応用を効かせることが出来た。</p> <p>昭和17年(1942)以降</p>	 <p>「標準服を着る」 発表された婦人標準服についての普及記事。桑沢洋子、田中千代など洋裁家として人気を集めていた洋裁家たちが標準服の利点を述べている。</p> <p>『婦人画報』第466号 昭和17年(1942)12月</p>
 <p>婦人標準服 甲式一部型 「甲」型のワンピースタイプの婦人標準服。</p> <p>復元</p>			

・戦時下の女性と服装 (2)銃後を支えた服装

(2)銃後を支えた服装

日中戦争の開戦とともに婦人会の活動が活発になると、街頭ではかっぱう着姿の女性が多く見られるようになります。昭和7年(1932)に誕生した大日本国防婦人会の会服としてかっぱう着が採用されて以降、銃後を支える婦人会の活動着として定着していきました。

防空演習が活発化すると、女性には活動的な服装が求められ、戦時下における婦人服装の代名詞であるもんぺが普及しました。昭和19年以降、本土空襲の激化に伴い、空襲警報発令と同時に行動出来る日常着として、もんぺは着用されるようになります。女性たちは手持ちの着物をもんぺに更生し、空襲に備える日々を送りました。

婦人会とかっぱう着

かっぱう着やたすきは、銃後の女性として、出征時の見送りや炊事班などの婦人会の活動の際に着用されましたが、次第に街中で日常的に着用する姿が見られるようになります。

昭和16年(1941)の太平洋戦争の開戦以降、頻繁に行われるようになった防空演習で女性自ら消火活動にあたるようになり、より活動的なもんぺが着用されるようになりました。



出征兵士を見送る大日本国防婦人会  
東京での国防婦人会の奉仕活動。

昭和12年(1937)8月  
日本写真家協会(JPS)提供  
撮影:土門拳



大日本国防婦人会制服

国防婦人会活動における制服。街頭で献金を訴える団体はたすきを着用することが主流だったため、そのまま採用された。

昭和7年(1932)から昭和17年



大日本婦人会会員制服型紙

昭和17年に愛国婦人会と大日本国防婦人会在統合されて発足した、大日本婦人会制服の型紙。

昭和17年(1942)から昭和20年

空襲の激化ともんぺの普及

もんぺは、昔から野良着として東北地方に伝わる衣類で、長着の上から着用されてきました。昭和13年(1938)頃になると防空着として都心部でも紹介されるようになり、昭和17年には婦人標準服の活動衣として採用されました。

防空訓練時、男性に代わって女性たちの活動性が求められるようになると、衣類の機能が重視され、もんぺが選ばれるようになります。昼夜問わず空襲警報が発令されるようになると、日常的にもんぺが着用されるようになりました。



「支那事变版画」第七篇 銃後婦人  
防空演習を描いた版画。消火活動等で動きやすさが重視されたため、もんぺの着用が推奨された。

昭和13年(1938)12月

・戦時下の女性と服装 (2) 銃後を支えた服装

			
<p>読賣ニュース焼付版「埼玉県秩父郡で行われた『厚生結婚式』」 もんぺ姿の女性と国民服姿の男性3組が結婚式を行っている様子。もんぺや国民服は、結婚式の衣装としても着用可能であるとされていた。</p> <p>昭和17年(1942) 読売新聞社</p>	<p>上衣ともんぺ 和装を更生して作られたもんぺ。</p> <p>戦中</p>	<p>和袖の上衣ともんぺ 和装を更生したもんぺ。上衣は和袖のまま更生されている。非活動的かつ非経済的という観点から次第に筒袖が推奨された。</p> <p>戦中</p>	<p>女学生の制服(上)ともんぺ 女学生の制服にももんぺが採用され、セーラー服などの上衣に、スカートの代わりにもんぺを着用した女学生の姿が多く見られた。</p> <p>戦中</p>
		<p>杉野芳子 明治25年(1892)～昭和53年(1978) 千葉県生まれ。大正3年(1914)、単身で渡米し、現地で洋裁を学んだ。「洋服の良さを一般の女性にも知らせて、洋服を普及させたい」との思いから、大正15年にドレスメーカー女学院を開校し、ドレメ式原型を開発した。洋裁教育の他、戦前・戦後ともに日本初のシヨールを行う等、国内服装業界において、洋装の発展と普及に一役を買った。</p>	
<p>京都織物株式会社への学徒勤労動員 勤労動員へ向かう精華高等女学校(現:京都精華学園高等学校)の女学生たち。上衣はセーラー服、下衣にもんぺを身に着けている。</p> <p>昭和19年(1944)</p>	<p>型紙「防空モンペ新縫法型紙」 もんぺの型紙。正規の手順や型紙はなく、女性たちは雑誌や発売された型紙を参考にすると、婦人会や隣組などで情報を共有し、制作していた。</p> <p>昭和14年(1939)年以降</p>		<p>ドレスメーカー女学院の防空服 杉野芳子考案のオーバーオール式の防空服。昭和17年以降、学院の制服として制定され、通学時や勤労報国隊として工場に出勤する際にも着用された。</p> <p>昭和17年(1942) デザイン:杉野芳子 学校法人杉野学園ドレスメーカー学院提供</p>

・戦時下の女性と服装 (2) 銃後を支えた服装

<p>田中千代 明治39年(1906)～平成11年(1999) 東京都生まれ。昭和5年(1930)に渡欧し、欧州諸国でデザインを学ぶ。帰国後に、カネボウの初代デザイナーに就任した。「皇月会」を発足すると、昭和26年には学校法人田中千代学園を設立した。日本初となるプロモデルによるファッションショーの開催や日本人初のバイヤーとしてクリスチャン・ディオールの型紙の買い付けなどを行った。香淳皇后の衣装デザインを担当した。</p>	 <p>田中千代考案の非常時服(『主婦之友』第25巻第11号) 日常着としても着用可能な上衣とズボンに分かれたもの。上衣に肩章を付けることで、ズボンの吊るしやかばんを持つ際に肩の負担を軽減するようにデザインされている。</p> <p>昭和16年(1941)11月</p>		

洋装文化の流入 (1) 物資不足と洋裁の需要

洋装文化の流入

昭和20年(1945)の終戦を迎えてもなお、物資不足による生活苦が続きました。女性たちは農村に買い出しに出向き、手持ちの衣類と食糧を交換する「たけのこ生活」を送ります。物資不足解消のため、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)は軍用品の放出や日本向けの支援物資の提供等の施策を行いました。

一方で、洋装を着こなす進駐軍の将校夫人や女性兵士の姿は日本人女性たちにとって憧れの的となりました。この結果、軍服風のスーツや短いスカートが流行し、アメリカンスタイルを含めた洋装が隆盛していきます。

(1) 物資不足と洋裁の需要

空襲により多くの工場や機械などが焼失し、設備を失ったことで、終戦後は物資の生産力が大きく低下しました。さらに、海外からの引揚げや復員が始まると、物資や食糧は国内での需要が供給を大きく上回り、一層の物資不足に陥りました。

昭和22年(1947)9月に衣料切符制度の再開が決定される一方で、実際の供給量は衣類の新調には満たない量でした。わずかな布ですら入手が難しい状況のなか、女性たちの間で洋裁の需要が高まります。物資がない時代ではあるものの、夫の代わりに一家の大黒柱として洋裁で生計を立てる戦没者妻を中心に、洋裁への憧れを持ち洋裁学校へ駆け込む女性が増加しました。



「着替へモナイ引揚者ニ衣類ヲ。」  
終戦直後に掲示された引揚者への衣類提供を呼びかけるポスター。引揚者に向けて、国内では様々な救護活動が行われた。  
昭和20年(1945)  
恩賜財団戦災援護会

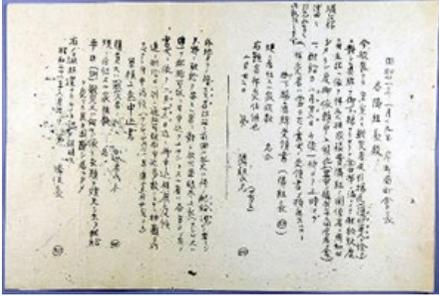


「第一回静岡県復興宝篋」  
復興資金調達を目的に静岡県が開催した宝くじの宣伝ポスター。特賞に衣類の生地や純綿地が選ばれている。  
昭和22年(1947)

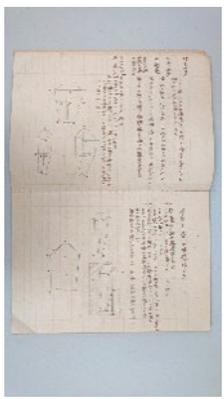


ワンピース  
洋裁学校を卒業後、洋裁を生業にしていた女性が制作したもの。着物を更生してワンピースにしている。  
昭和24年(1949)以前

洋装文化の流入 (1) 物資不足と洋裁の需要

			
<p>原稿 開業医をしていた女性が戦後に書いた原稿。戦中の着の身着のままの生活から解放され、おしゃれに対して希望が湧いてきた女性の気持ちを綴っている。 昭和 21 年(1946)</p>	<p>ノート 東京都の男性が戦後の暮らしを記したノート。妻が食糧調達のために、夫の衣類と交換したことが記されている。 昭和 21 年(1946)頃</p>	<p>文書(皇室ヨリ真綿ヲ御下賜) 隣組内で回覧された文書。皇室から戦災者に向けて真綿を下賜されたことが記載されている。 昭和 21 年(1946)12 月 19 日</p>	<p>『スタイルブック 1947 冬』 『暮らしの手帖』の前身雑誌。花森安治と大橋鎮子が女性のために刊行した。物資不足の時代に衣食住を豊かにすることを主題に、少ない生地で作れる直線断ちワンピースなどを考案・紹介した。 昭和 21 年(1946)11 月 25 日</p>
<p>洋裁学校と洋裁ブーム 昭和 21 年(1946)のドレスメーカー女学院の再開を契機に、文化服装学院とドレスメーカー女学院は洋裁学校 2 大巨頭として、人気の学校となりました。さらに、各学校の卒業生が地元で洋裁学校を開校することで、学校数が増加していきます。昭和 22 年に 400 校、4 万 5000 人だった生徒数は昭和 26 年には 2000 校、36 万人まで膨れ上がりました。 当初は技術を身に着けるために通う女性がほとんどでしたが、次第に花嫁修業の一つとして洋裁を学ぶ女性も増えていきました。</p>	 <p>洋裁学校再開当日に列をなす女性たち ドレスメーカー女学院が、戦後初めて入学願書を受け付けた当日の様子。入学希望の千数百名が集まり、最寄りの目黒駅まで列が伸び、MP(憲兵)が駆けつける事態になった。 昭和 21 年(1946)1 月 学校法人杉野学園ドレスメーカー学院提供</p>	 <p>「文化服装学院連鎖校公認城内服装文化学院」 文化服装学院公認の連鎖校の入学案内のポスター。洋裁学校の卒業生たちが地元で洋裁学校を開校することで、学校数が飛躍的に増加した。 昭和 22 年(1947)以降</p>	 <p>『本科テキスト』 戦後のドレスメーカー女学院の本科テキスト。 昭和 24 年(1949)12 月</p>

洋装文化の流入 (1) 物資不足と洋裁の需要

			<p><b>服飾雑誌の復刊</b></p> <p>戦時下では、様々な雑誌が企業整備によって廃刊と休刊、統合に追い込まれました。</p> <p>昭和21年(1946)5月、中原淳一は『きものノ絵本』というスタイルブックを復刊します。これを皮切りに、昭和21年7月に『装苑』が復刊、昭和24年4月に『ドレスメーカーキング』など、次々に服飾雑誌が刊行されていきます。</p>
<p>洋裁帳 文化服装学院で洋裁を学んだ女性の洋裁帳。戦没者の妻が洋裁店の開業を思い立ち入学した。布が不足していたため、幼少期の着物の端切れや軍服の生地などを使用していた。</p> <p style="text-align: right;">戦後</p>	<p>入学案内 菅谷洋裁女学院の入学案内。4月と10月、半期ごとに入学が可能になっている。</p> <p style="text-align: right;">戦後</p>	<p>ワンピース 山形在住の女性が東京で生地を買い求めて、本を見ながら自力で縫い上げたもの。</p> <p style="text-align: right;">昭和25年(1950)</p>	 <p>『きものノ絵本』 中原淳一が手掛け、復刊したスタイルブック。つけ襟を変えることで10日間衣類を着回しするスタイルや更生技術の向上が衣生活を左右すると述べている。</p> <p style="text-align: right;">昭和21年(1946)5月5日</p>
<p>中原淳一 大正2年(1913)～昭和58年(1983) 香川県生まれ。人形作家としてデビュー後、『少女の友』の挿絵を手がけるなど、画家としての一面も見える。昭和14年に東京都麹町に「ヒマワリヤ」を開店し、文房具や人形、洋服等の販売を開始した。復員後、空襲で罹災した店舗を神田に移し、出版や制作活動を再開した。</p>	 <p>ワンピース</p> <p style="text-align: right;">復元</p>	 <p>「ヒマワリ型紙」 『きものノ絵本』に掲載されたワンピースが後に「ヒマワリ型紙」として発売されたもの。全ての型紙の袖部分は共通になっている。</p> <p style="text-align: right;">昭和21年(1946)</p>	

洋装文化の流入 (1) 物資不足と洋裁の需要



『装苑』(昭和22年1月号)

昭和11年に文化服装学院が主体となり出版された洋装専門誌。昭和19年2月に休刊したものの、昭和21年7月に復刊した。

昭和22年(1947)1月

洋装文化の流入 (2) 女性たちに浸透する洋装

(2) 女性たちに浸透する洋装

終戦後も女性たちは引き続きもんぺを穿き、手持ちの衣料品や進駐軍からの放出品を更生して着用していました。戦時下では質素儉約のもと華美な服装が禁止されていましたが、終戦とともに和装やもんぺだけではなく、ワンピース等の洋装に更生した服装が見られるようになります。

また、昭和21年(1946)頃になると外国からの物資支援が開始されました。物資の中には食糧以外にも、スカートやワンピースなどの衣料品も含まれていました。

進駐軍の将校夫人や女性兵士たちの存在は、占領期の日本人女性たちにとって洋装文化に直接触れる機会となり、徐々に文化が浸透していくことになります。

放出品と支援物資

物資不足を補うため、進駐軍が放出した絹製の落下傘などの布地が民間に払い下げられました。女性たちはそれを入手し、自分たちの衣類に更生していきました。

昭和21年(1946)11月からは「日本難民救済会」が母体となったララ(LARA; Licensed Agencies for Relief in Asia)が援助物資を送ります。物資に含まれる衣料品は、外国人の体格に合わせられたサイズで、日本人女性には大きく、自分でサイズの調整をする必要がありました。



放出物資のフランネル

進駐軍が放出した生地が露店で売られている。軍の放出品や新品の布地は闇市や露店で売買が行われていた。

昭和21年(1946)から昭和24年  
オリバー・L・オースティン Jr.撮影 Copyright of  
Photography: Dr. Annika A. Culver, Curator of the  
Oliver L. Austin Photographic Collection.



救援物資の衣料を仕分ける人びと

静岡県小笠町(現・静岡県菊川市)に配分されたララ物資を仕分ける女性たち。

昭和24年(1949)

American Friends Service Committee 提供



帯

放出された落下傘の絹糸を利用して自作した帯。幼少期の着物を細かく裂いて、絹糸と合わせて裂き織りにした。

昭和20年(1945)



オーバー

ララ物資として送られたアメリカ製の婦人用オーバー。ララ物資として提供される衣類は、上質なものが多かったが、同時に日本人の体格には合わない大きいものも多かった。

昭和21年(1946)以降

洋装文化の流入 (2) 女性たちに浸透する洋装

進駐軍とアメリカンスタイルの流行

進駐軍の将校夫人や女性兵士のスタイルは「アメリカンスタイル」として国内に浸透しました。

また、洋装のデザインや写真が掲載された海外のスタイルブックが流通し始めると、女性たちは雑誌などを通じて洋裁の技術を学んでいきました。

昭和24年(1949)にはアメリカの通信販売カタログの掲載権を獲得した日本織物出版社が『アメリカン・スタイル全集』を創刊し、12万部を発行、第2号は15万部という戦後スタイルブックのベストセラーになりました。



図書館でファッション雑誌に見入る女性たち  
昭和24年(1949)  
米国国立公文書館提供



パンプス  
終戦後、進駐軍の女性がいっていた影響で、5cmほどのヒールやはき口がハートにカットされたパンプスが流行した。  
昭和23年(1948)頃



『アメリカン・デザイン No.1』  
戦後、アメリカの流行情報を掲載したスタイルブックが発売された。多くの情報はアメリカを通して国内に流入したため、ディオールの新ウルックもロングスカートとして数年遅れで浸透した。  
昭和22年(1947)6月



「聖心かぞえ歌」  
聖心女子大学学寮で学生が作詞したかぞえ歌。制服を着用していると、保安隊に間違われるとうたわれている。  
昭和28年(1953)



制服を着用して課外活動に励む学生たち  
昭和26年(1951)  
聖心女子大学提供



聖心女子大学創立期の制服  
聖心女子大学初代制服。昭和23年の開学当初は進駐軍女性兵士の払い下げを着用していた。物資不足が解消されると、デザインを模倣して新調した。  
昭和23年(1948)以降  
聖心女子大学蔵

・大衆化の時代へ (1)職業デザイナーの隆盛とパリモード

・大衆化の時代へ

占領期終盤になると、社会状況と連動するように、女性の服装にも大衆化の兆しが見え始めます。高度経済成長に伴い、女性たちの社会進出と地位向上が加速し、徐々に服装をおしゃれとして楽しむ余裕が出てきました。

昭和27年(1952)のサンフランシスコ講和条約発効で日本が国際社会への復帰を果たすと、アメリカンスタイルからパリモードへと服装の志向が変化していきます。また、ナイロンやテロン等の化学繊維の開発が進んだことにより、繊維業界と服装業界が相互的に発展していきました。

(1)職業デザイナーの隆盛とパリモード

昭和27年(1952)にサンフランシスコ講和条約が締結すると、諸外国のファッション情報が直接日本に流入するようになります。昭和22年にニュールックを発表して以降、欧米の服飾界で圧倒的存在感を放っていたクリスチャン・ディオールは、国際社会に復帰した日本の服飾界にも大きな影響を及ぼしました。終戦からしばらくの間、アメリカンスタイルが流行の中心でしたが、昭和28年11月の文化服装学院が30周年記念事業でディオールのショーを行うと、パリモードへ傾倒するようになりました。日本のファッションデザイナーたちは次々と発表されるディオールのラインを日本人に合うように再構築し、紙面や学校で発表していきます。



ひよしやでオーダーを受ける森英恵  
森英恵が昭和26年に新宿で開店した「ひよしや」の様子。オリジナルデザインの衣類を売る一方で、進駐軍の妻たちからPX(酒保)で買い付けた布やボタンなどが持ち込まれ、依頼を受けていた。

昭和26年(1951)以降  
森英恵事務所提供



ピエール・カルダンの講習会  
フランスのデザイナー、ピエール・カルダンが来日した際の様子。国内の洋裁学校に来校し、立体裁断等の技術講習や講演会を行った。

昭和33年(1958)  
学校法人杉野学園ドレスメーカー学院提供



Hラインスーツ  
田中千代がデザインしたHラインスーツ。クリスチャン・ディオールがアルファベットラインとしてコレクションに発表したHラインを日本人に合うように田中千代が再構築したもの。

昭和29年(1954)  
学校法人田中千代学園蔵  
デザイン:田中千代



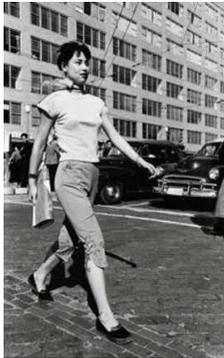
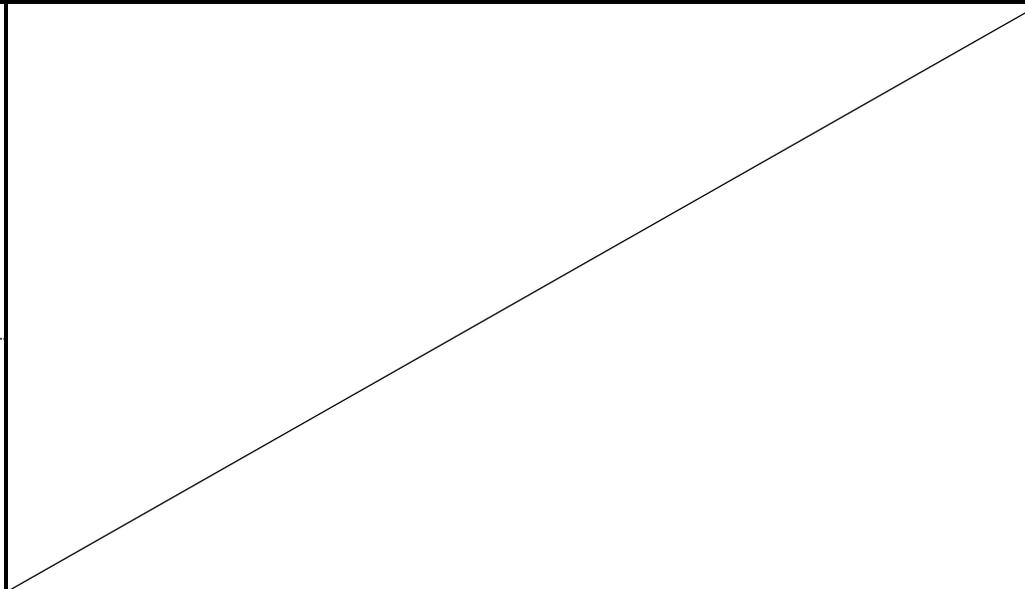
ワンピース・ドレス  
杉野芳子がデザインした夏の外出着。フレアスカートが濃淡の違う3色の青で接がれたデザインになっている。

昭和30年(1955)  
学校法人杉野学園ドレスメーカー学院蔵  
デザイン:杉野芳子

・大衆化の時代へ (2)化学繊維時代の到来と大衆化

<p>(2)化学繊維時代の到来と大衆化</p> <p>昭和25年(1950)に朝鮮戦争が始まると、アメリカへの輸出需要が増加し、繊維産業は、急激な成長を遂げました。丈夫で安価な化学繊維の開発が進むと、衣類の素材にも広がりが見られるようになり、昭和28年の繊維消費量は、戦前を大幅に上回るまで成長しました。</p> <p>高度経済成長期になると、若い女性たちの間では映画の登場人物の服装に影響を受けたファッションが流行します。映画やテレビなどメディアの幅が広がることで、ファッションの大衆化が飛躍的に進みました。</p>		<p>化学繊維の開発</p> <p>戦前にナイロンを開発していた東洋レーヨン(現・東レ株式会社)は、特許の重複を防ぐために、昭和26年(1951)、デュポン社(フランス)のナイロン技術を取り入れました。ナイロン特有の透け感は、ブラウスに重宝され、昭和27年にはナイロン製ブラウスが女性たちの中でブームになりました。</p> <p>昭和32年には東洋レーヨンと帝国人造絹糸(現・帝人株式会社)がポリエステルを原料とした繊維テトロンを開発しました。ポリエステルは耐久性が高く、収縮しやすい特性があります。</p>	
			
<p>ナイロン製ストッキング</p> <p>国産絹製のストッキングが主流だったが、耐久性に問題があった。昭和27年以降にナイロン製のストッキングが発売されると、安価で丈夫だったため、主流になった。</p> <p style="text-align: right;">昭和27年(1952)以降</p>	<p>ハンドバッグ</p> <p>ビニール製のハンドバッグ。戦前・戦中は布製か代用品のカバンが主流だった。戦後になると様々な素材のショルダーバッグやハンドバッグが流通し始めた。</p> <p style="text-align: right;">昭和30年(1955)頃</p>	<p>スカート</p> <p>テトロン製のスカート。プリーツ加工品のため、洗濯の方法などが記載されている。</p> <p style="text-align: right;">昭和32年(1957)以降</p>	

・大衆化の時代へ (2)化学繊維時代の到来と大衆化

<p>シネモードとミッチーブーム</p> <p>昭和29年(1954)に映画『君の名は』や『麗しのサブリナ』が公開されると、登場人物たちのファッションである真知子巻きやヘップバーンスタイルなどが女性たちの間で流行します。映画発信の服装は「シネモード」と呼ばれました。</p> <p>昭和33年、皇太子殿下(現・上皇陛下)のご成婚を前に婚約者の正田美智子さんの服装が話題になりました。白いロング手袋やカチューシャ、ワンピースなどが流行し、「ミッチーブーム」として社会現象を巻き起こします。</p>	 <p>真知子巻きをした女性</p> <p>昭和28年(1953)12月 朝日新聞社提供</p>	 <p>サブリナスタイルの八頭身美人</p> <p>映画『麗しのサブリナ』に登場するオードリー・ヘップバーンのスタイルを真似て、ショートヘアとサブリナパンツで街中を歩く女性。</p> <p>昭和30年(1955) 撮影:林忠彦 林忠彦写真研究室提供</p>	 <p>街をゆくミッチー・スタイル(髪型)</p> <p>正田美智子さんのヘアスタイルを真似て街中を歩く女性たちの様子。</p> <p>昭和34年(1959) 毎日新聞社提供</p>
 <p>着せ替え人形</p> <p>『君の名は』に登場する氏家真知子の服装をモデルに作られた着せ替え人形。真知子が劇中でスカーフを巻くと、真知子巻きとして女性の間で大流行し、多くの商品展開がされた。</p> <p>昭和29年(1954)</p>	 <p>こけし</p> <p>皇太子殿下(現・上皇陛下)と美智子妃ご成婚をモチーフとしたこけし。着せ替え人形などの商品展開や雑誌で特集を組まれるなど、服装が大いに話題になり、模倣する女性が多かった。</p> <p>昭和33年(1958)以降</p>		

・大衆化の時代へ (2)化学繊維時代の到来と大衆化

エピローグ～時代をまとう女性たち～

昭和30年代、高度経済成長は日本人の生活様式を消費型へと変えていきました。女性の社会進出が進んだことで、服装に求める役割にも変化が見られるようになります。就業した女性の家事に割く時間が減少することにより、既製品の洋服の購買が促進されていきました。

その一方で、昭和50年頃に和服の市場規模は戦後のピークを迎え、ウール製や合成繊維製の和服が人気を博しました。高価な絹製の和服も生産数が増加すると一般家庭でも身近なものとなり、ハレの日の服装には華やかな和服が好まれ続けます。

これまで日常着だった和服は特別な日の盛装として、洋服は日常着として、女性たちは目的によって服装を選び、自由に使い分けるようになります。「ファッションは時代を映す鏡」と言われるように、女性たちの装いは社会とともに変化し続けていきました。

## イベント

### (1) ワークショップ

巾着を作ろう！

期日：令和5年3月26日（日）

時間：14時～17時

場所：3階会議室

定員：50名

着せ替え紙人形を作ろう！

期日：令和5年4月29日（土）

時間：14時～17時

場所：3階会議室

### (2) 展示解説

担当者による展示解説を行います。

期日：令和5年4月2日（日）・4月23日（日）

時間：14時30分～（所要時間 約30分）

場所：3階特別企画展会場

	タイトル	内容	年代
1	アサヒホームグラフ No.50	働く女性 地方や都会で働く女性たちの紹介。洋装や和装で働く女性たちの様子。	昭和15年9月1日
2	日本ニュース第175号	空の決戦熾烈 防衛堅し バケツ注水に新兵器(大阪) 隣組の防空演習は日常的であった。消火の主力はバケツであり、大阪では、バケツの水を如何に火点に上手にかけられるかという競技大会が行われた。隣組代表のもんぺに防空頭きんの婦人が目立つ会場。	昭和18年10月12日
3	新日本ニュース第142号	秋のアラモード 銀座三越で行われた秋の流行を紹介するファッションショーの様子。	昭和23年9月28日
4	国際ニュース第2号	お洒落学校腕くらべ ドレスメーカー女学院で行われた学内発表会の様子。	昭和24年4月7日
5	新日本ニュース第221号	春のモード(パリ)フランス パテー・ジュルナル特約 ニュース映画の内容を充実しようと、日映はフランスのパテー社とフィルムとの交換をはじめたが、今週は本場フランスのファッションを紹介した。	昭和25年4月4日
6	朝日ニュース第507号	女の園 一万人の洋裁学校入学式の様子。	昭和30年4月26日

上映時間 約10分